

真田町文化財調査報告書

真田氏城跡群

その歴史と調査の概要

1982

真田町教育委員会



真田氏城跡群

その歴史と調査の概要

序

永禄年間上野国吾妻郡の諸城を次々と攻略した真田幸隆、天正3年三河国の長篠合戦で討死した信綱・昌輝、同11年上田城を築城し、徳川氏の大軍を二度までも撃退して、天下にその名を示した昌幸・幸村父子、大坂の陣における幸村・大助の獅子奮迅の働き、江戸末期まで連綿と続く基礎を固めた初代松代藩主信之等々今に至るも真田氏一族の名声は尽きることはありません。

真田氏は、わが真田町を発祥の地とし、上野・三河・甲斐・上田・大坂・松代等全国的に活躍の舞台を広げ、至るところに往時を偲ばせる貴重な遺跡をとどめております。

わが真田町においても、真田氏ゆかりの城跡・社寺・文書・伝承等が数多くこされており、これら史跡の調査は多年の懸案となっていました。

ようやく機が熟して、信濃史学会長一志茂樹氏を中心に、上田小県誌編集委員長黒坂周平氏ならびに関係諸氏の協力と併せて町文化財調査委員等によって昭和51年9月から4か年にわたる調査を実施することができました。

本調査は古代中世にかかる史跡であるだけに、文献に乏しく町の古い地名・地図・伝承等を手がかりに、地形・水利・集落・古社寺・石造文化財・城館跡遺構等可能な限りの実地踏査に加えて、一志氏ご自身の数十年にわたる調査資料を駆使しての科学的・実証的・総合的調査が行われました。

これらの調査結果については、一志氏が昭和52年10月「真田氏の発祥」および53年4月「真田氏の城跡群」と題して、延べ8時間に及ぶ講演をもって発表されました。氏は「真田氏の城跡群は極めて貴重な史跡であり、その報告書は自らまとめたい。」との強い熱意を寄せておられましたが、不幸にも病魔に倒れられ、執筆はご無理な状態となりました。

そこで、氏のご了解を得て、終始調査と共にされた黒坂周平氏に執筆をお願いした次第です。

このたび、かかる経緯によって遅れはしましたが「真田氏城跡群調査報告書」

として刊行することができましたことは無上の喜びであります。本城跡群が、真田氏の発祥との関連においても、わが町の貴重な文化財であることは報告書の内容が示すとおりであります。本城跡群が将来にわたって、真田町はもちろん上小・全県の心ある人々によって、保護活用されることを切望する次第です。

おわりに一志茂樹氏・黒坂周平氏ならびに本調査にご協力を賜りました多くの方々のご労苦に対し、厚くお礼を申しあげます。

昭和57年8月

真田町教育長 清水憲雄

I. 調査の経過

- 1 調査主体 真田町教育委員会
- 2 調査者 志茂樹 黒坂周平
- 3 調査協力者 小池雅夫 長岡克衛 櫻井松夫 竜野敬一郎
丸山知志 久保浩美 坂口益次 清水利雄
遠藤憲三 久保達雄
- 4 事務局 清水憲雄 横沢 理 柳沢孝雄 柄沢 衛
坂口芳雄 松井文雄 内海勝利 堀内精次
押森弘文 柳沢章夫 柳沢久雄 飯島和徳
- 5 第一次調査
 - 昭和51年9月16日・17日・18日
 - 長・本原方面現地調査
菅平・大籠街道・四阿山南腹駒形神社跡・松尾城・日向畠遺跡・山家神社・長谷寺弘長石碑・真田氏本城・天白城・真田氏館跡
- 6 第二次調査
 - 昭和52年10月28日・29日・30日
 - 傍陽方面現地調査
横尾城・内小屋城・信綱寺・四日市・根小屋城・耕雲寺・八幡宮・猿ヶ城・松代街道・洗馬城・実相院・堂平・大良
- 7 第三次調査
 - 昭和53年4月26日・27日・28日
 - 真田氏発祥の跡を追っての城跡調査
初期居館跡(萩区を中心とした洗馬方面)
第二期居館跡(内小屋・横尾城・根小屋城・洗馬城)

第三期居館跡（本城・天白城・松尾城・真田氏館跡・町割）

8 第四次調査

- 昭和54年4月25日・26日

一志・黒坂両氏と町文化財調査委員により、主として県史跡指定を受ける範囲の概略についての実地調査

9 第五次調査

- 昭和54年9月13日・14日

一志・黒坂両氏、県文化課堀内主事、町文化財調査委員により史跡指定申請の手順及び指定範囲の再検討を、実地調査を含めて実施

10 航空測量図の作成

- 昭和54年8月～10月

- コクサイ航測株式会社委託

＜内容＞

①松尾城・横尾城・根小屋城・天白城の補足図化	1 5000
②洗馬城・根小屋城・横尾城・松尾城図化	1 2000
③本城・天白城・真田氏館跡図化	1 1000

目 次

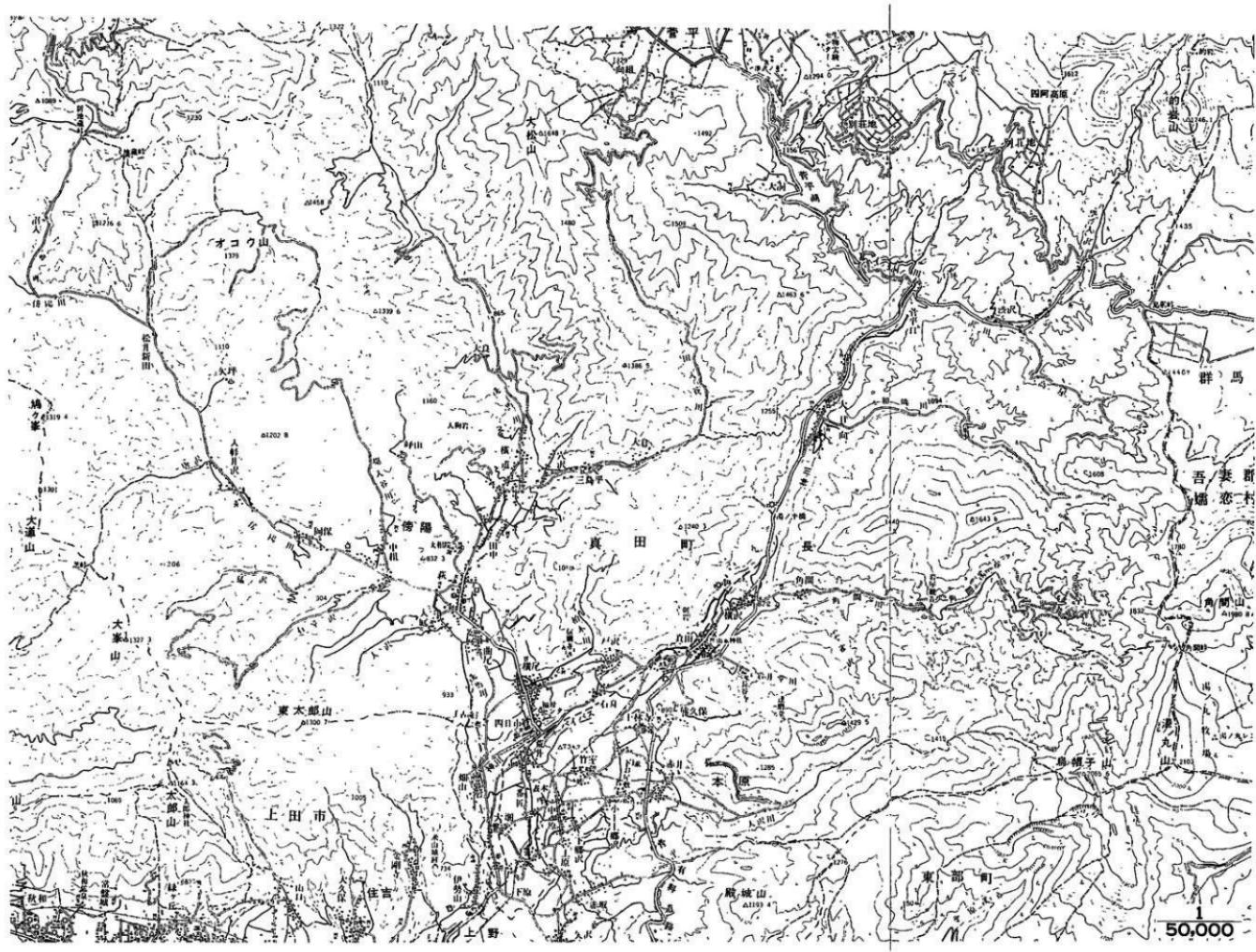
◇ 序

I 調査の経過	
真田町全図	
II 調査結果の概要まえがき	1
III 真田氏の歴史	3
——とくにその発祥について——	3
IV 真田氏城跡群	11
◇ あとがき	23

城跡群位置図

城跡群遺構付図

- ・真田氏本城跡
 - ・天白城跡
 - ・松尾城跡
 - ・横尾城跡，内小屋城跡
 - ・根小屋城跡
 - ・洗馬城跡



Ⅱ. 調査結果の概要まえがき

まえがき

上田市の東北10km、スキー場、避暑地として有名な菅平を含む面積181.7平方キロメートル、人口10,600人の町が真田町である。

最近高原野菜や果樹の出荷地としても名高くなっているが、何といってもこの町は天下にその名が知れわたっている真田氏の発祥地として、きわめて貴重な歴史的存在といってよい。

とくに、昭和51年9月町当局の要請をうけて、県文化財審議会長一志茂樹博士、上田小県誌編集委員長黒坂周平等が中心となって調査団を編成し、本格的調査がはじめられてから、長野県全体における本地方の歴史的価値は、にわかに注目されるところとなった。

それ以降昭和54年10月まで五次にわたる同調査団の徹底的ともいえる実地踏査の結果、この地方に残る城館跡は、ほぼ完全に近く原形をとどめていることが判明し、しかもそれは、中心城郭と称すべきものと、それをめぐる多くの支城的性格のものによって構成されている一大城跡群であると考証されるに至った。

しかもそれは、東には中世における信濃の名族海野氏の本拠であった海野郷と、北東には、鳥居峠を越えて上州吾妻郡地方と直接連絡し、ひとり信州のみならず上州・信州にわたっての広大な地域の政治的中心として、あるいは古代から、特別の役割を果たして来た城跡群ではなかったかという推論も立てられるようになった。

このことは、名族真田氏の発祥を究明するうえに、きわめて重大な手がかりを提供するのみでなく、信州における土豪の発生と、それがやがて戦国武士団の中核として成長し、さらには、近世大名としての位置を確立するまでの道を示唆する絶好の学術的資料といわねばならない。

しかも真田氏は信州に生まれ、幾多の波乱を経ながら、幕末まで信州を離れることなく終った唯一の大名であることを考えると、真田氏城跡群の解明は、信州に課せられた一大問題であるとも言えるであろう。

本稿は、その真田氏城跡群を、4か年にわたった調査の記録をまとめたものであるが、紙数の制約もあって、可能な限りの要約にとどめざるを得なかった点、まずご了承願わなければならない。何れ他口、詳細な調査報告書も何等かのかたちでまとめられるであろうことを期待し、さらにそれが町誌となって発刊される日を望んでやまない。

Ⅲ. 真田氏の歴史

—とくにその発祥について—

真田氏という名の文献上の初見は、『大塔物語』である。

周知のように『大塔物語』は応永7年(1400)更級郡篠の井(現長野市)で行われた信濃守護小笠原長秀と信濃の国人層といわれた在地土豪団との戦い——これを大塔合戦と通称している——を物語り風に記述したもので、物語ではあるが、史実にもかなり忠実な点があるとされている。

この大塔合戦というのは、簡単にいうと、隣国である甲州出身の小笠原氏が信濃守護(今でいえば長野県知事というところか)に任命されたのを快く思わなかった信州の土豪たちが(これを国人層といった)連合して、小笠原氏に対抗したところから起った戦いで、結局は国人層が勝ち小笠原氏の敗退に終った信州中世史としては、大きな出来事であった。

その国人層の中心となったのは、村上氏・海野氏・高梨氏・井上氏など大体東北信の豪族であったが、この外に仁科・福津・春日・香坂・西坂・落合・小田切・窟寺等という土豪たちが組織していた大文字一揆(「大」という文字の旗のもとに結集した同志の意)と称するものがあった。『大塔物語』を見ると、この大文字一揆の一方の将は小県の福津氏で、これが大塔城の一の攻口の攻撃を担当し、その部下の将として三村・桜井・別府・小田中・実田・横尾・曲尾等の諸将が奮戦した様子を記している。

これが真田氏(実田氏とも記す)の文献上の初出であるが、横尾氏・曲尾氏も列記されているところを見ると、それらの土豪と一味同心のものであったに相違なく、実田氏が筆頭であることは、横尾・曲尾氏の上席にあったことを暗示するものであろう。

なおこの記述の中に、福津氏をはじめとして、桜井・別府・小田中等現東部町の土豪たちが真田・横尾・曲尾三氏と名を列ねているのは、もともと現真田町の土豪たちと緊密な連絡があったことを示唆するものといわなくてはならない。

この点を裏書きするかのように、現在真田氏の系譜として残るものは、——それは大体江戸期につくられたものであるが——すべて真田氏は、小県郡東部町の名族海野氏の直系として書かれている。また『信陽雑誌』に永享10年(1438)の結城合戦に村上頼清に従って出陣した信濃の武士の中に、海野十郎・福津小二郎・室賀入道等と共に真

田源太・同源五・同源六などの名が見える。

『上田小県誌歴史篇上』では(この出典はわからないが)「こうした諸点から考えると、真田氏は海野氏の系統をくむ庶族として、かなり古くから現在の真田町を本拠として土着していた土豪であったと見ることの方が自然だと思われる」といっている。このことは海野氏というより福津氏を考えなくてはなるまいし、庶族であるかどうかは別として、真田氏と海野・福津氏等——つまり現東部町の歴史とは、古くから太いパイプでつながっていたことに相違はないであろう。

ところで、この真田氏の発祥については『真田氏城跡群』の調査団長であった一志茂樹氏は、数次にわたる実地踏査の結果、次のような注目すべき見解を出している。
(以下『千曲』所載同氏論文並びに同氏講演等による)

古代一少くも今から1200年位前、信濃国には、古代の名族として知られている大伴氏が栄えていた。とくに東部町地方はその一つの中心であったことは『日本靈異記』という古い書物(平安初期の成立)に、この東部地方(当時蠶里といっていた)に大伴連忍勝なるものがいて、氏寺までもっていたと記事があることによっても推測することができる。連という姓をもち、氏寺まで造立していたということは、この大伴氏がかなりの豪族であったということを証明しているが、この大伴氏の勢力は、おそらく今の上田市あたりから佐久地方まで拡がっていたのではないかと想像される。

そしてこの大伴氏なるものの性格を考えると、おそらくは牧場の経営者であり、大陸ないしは半島から馬を飼う技術をもった人々を招聘して、牧場を経営するようになったものと考えられる。

(筆者註 東部町には白髪という地名が2か所も残っている。白髪というのは半島から帰化した人々の祀った祭神であることは、周知のことである。)

名馬の産地として有名な望月の望月氏は、この大伴氏の子孫であろうということは、あの望月に大伴神社という古社があるのによっても推測することができるが、真田氏もこの望月氏と同じように、大伴氏の血をひく氏族で、海野氏・福津氏などと同じ系統の一族であり、まず牧場の経営者として実力を發揮するようになったのではないかと思われる。

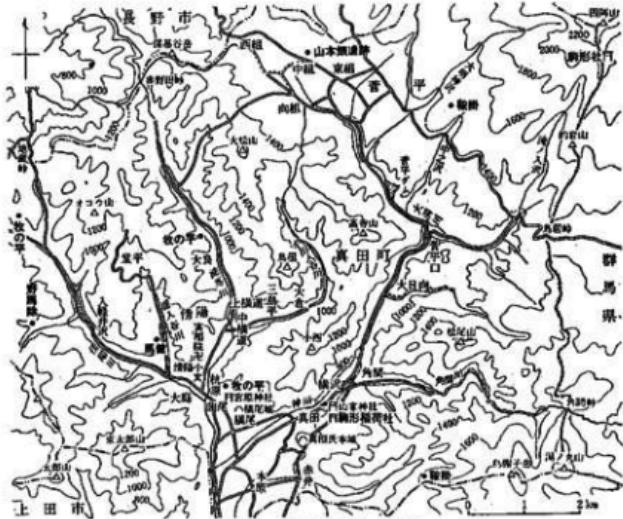
望月・海野・福津の各氏は一体のものであることは動かないが、真田氏もその一

族であることはまず間違いない。そして、真田氏の經營したのは——そのころは大伴氏といっていたであろうが——国牧であった。

(筆者註)古代には牧には朝廷の掌握する「勅旨牧」と国有の經營する「国牧」があった。国牧とは、最初豪族の私牧であったものが、大和政権が伸長して各国に国府がおかれるようになると次第に国の直轄する牧として発達した牧をいうのである。

信濃の国府(今でいえば県庁)は最初今の上田市におかれたことは衆目の認めるところであるが、その位置は確認されていない。但し長年にわたる調査の結果大体今の上田市染屋台ではないかと考えられるようになった。

国府は一国の政治・軍事を握る中枢であるから、相当の兵を常備しておく必要があった。その兵備を軍團といい平均1000人位の兵をもって一軍團が組織されていた。軍團が設けられれば馬軍が必要となる。(軍團は騎兵・歩兵の二種で編成されるのが例で、平均して一軍團約1000人の兵士と約200頭の軍馬からなっていた。その軍馬は当然その地方で養育しなければならない。その飼育養成の場所が国牧である。) 染屋台あるいはその付近に国府があったとすれば、そこに併置される軍團の騎馬



真田町牧関係地名図

を養育する牧場は、当然その周辺の適地となるはずである。ここで暫く眼を転ずると、国府想定地の背後に展開する雄大な四阿山や烏帽子岳の山麓地帯を注目しないわけにはいかない。すなわち今の真田地方である。

真田町地方で地形上からも、風土上からも最も特徴的なことは、いたるところ牧場に適当な条件をもっている場所があるという点である。そしてまた、いたるところに牧場的地名が残存していることも重要な事実として指摘しなくてはならない。

たとえば菅平をあとにしてまず鞍掛がある。これは一つの放牧地であることは間違いない。傍陽へ行くと名刹実相院があり、このご本尊は馬頭観音である。これは

この地方が牧場地帯であったきめ手である。また上洗馬地方に牧の平がある。ひらは平らでなく傾斜になったところをいう。やはりこの辺が牧であったことを示している。また地名ではないが、このあたりには牧内という姓の家が多い。おそらく牧からでた姓であろう。洗馬川を上った上横道から左へ入った天狗岩のそばにも牧の平があるし、中組のつつみ川の右岸には馬立という地名が残されている。その上の原は広くてゴルフ場にする計画があったとか。今も百町歩ある平場で、牧としては最高の場所である。



馬頭観音

尾牧場」という牧場も経営されていた。)

なお、今度新しくできた新地蔵峠の南側に沼平という沼のあとがあるが、あの上にも牧の平という地名が残っている。このように牧についての地名がたくさん残っているが、これは古代から中世にかけて大きな牧があったことを示唆するもので

(筆者註 現にこのごろまで「鳴

あり、今昔平にある北信牧場はその後身とみて差支えない。

昭和52年菅平中学校のすぐ前の山本畑の発掘によって、須恵器や土師器が出土したが、その中で注目すべきものとして耳皿の出土がある。耳皿というのは、神様に



箸をのせて差上げる皿のこと、伊勢神宮では今でも朝晚のご飯を供えるとき、このような耳皿で差し上げている。箸も大きく40~50cmほどのものが使われる。

これは、古代ここにあった牧の管理者(牧司ともいう)が一時住居していた仮住居であろう。こんな1200m^{エフフミ}もある高冷地に一年中住んでいたとは考えられないからおそらく夏場、牛馬を放牧する時期だけここに住んでいたのではなかろうか。

真田町の地区には、このような牧に関係した地名が多く、またそれに対応して牧にふさわしい草原・高原が豊富にある。そこでこれらの牧は何に使用されたかというと、前述のように国の牧一すなわち信濃の国府に直属する牧であったと考えるのが最も妥当だと思われる。何故かというと、この神川水系の下流にはおそらく国府が所在していたと考えられるからである。

国府は染屋台地にあったと推定しているが少くとも神川下流から程遠からぬところにあったことは疑いをいれない。そうするとその国府には、前にもお話した通り少くも二軍團位は所属していかなければならない。一軍團はこの地方におき、一軍團は東山道の入口の伊那谷においてたとしても、この地方では600頭ぐらいの軍馬は常

に養育しておかねばならないこととなる。その馬の養成地は遠隔地では困る。ちょうど真田町位の距離と広さが最適である。つまり國府直属の国牧は、この真田町地方におかれたと考えるのがもっとも納得できるものではないか。

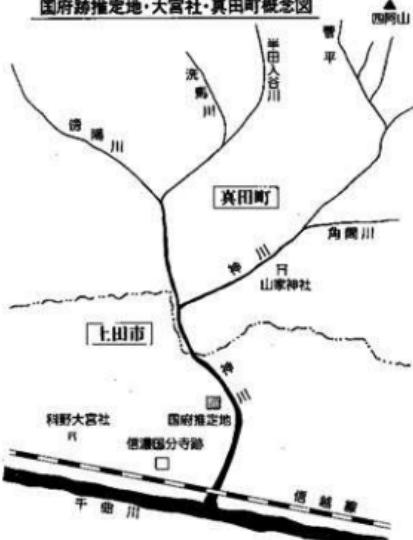
さて、國府をつくるにしても、牧で馬を養育するにしても、大変な労力が必要となるし、食糧を確保するだけで大きな力が背後にならなければならぬ。要するに大きな勢力者がバックとなっていなければ、その実現は不可能と考えねばならない。

それでも現在の上田地区にあった國府や、そのための真田町地方の国牧を完成させ、また管理した勢力者は誰かというに、それを私は真田氏の祖先——当時は大伴氏と称していたと思うが——と考えたいのである。

ここで、その証拠と思われるることを若干記しておくこととする。上田市常入にある「大宮さん」は古来から「科野總社」といって、信濃の國府と関係の深いお宮といわれている。このお宮の境内に「六所社」がある。六所社は六所明神ともいい、東西南北天地の神を祀り(筆者註、この六所の神については異説もある)毎朝國守(今の県知事にあたる)またはその使いがお参りして國の平安を祈って政治をしたところで、大体その國中の神が祀られてあるから懸坐ともいう。

ところで、この上田の大宮社境内の六所宮には説明がついている。それには「往

國府跡推定地・大宮社・真田町概念図





科野大宮社境内の六所明神社

古上田旧城地にあり、天正10年築城するとき、この大宮の境内に移すところにして、城主代々管轄の社なり」と書いてある。現在の上田城は天正13年の築城であるが、若干は年代が違っているが、ともかく現在の上田城が築城された時点では、この六所明神は上田旧城地にあったというのである。するとこの上田旧城地というのはどこになるのであろうか。今の上田城は、まだ築城されていないのであるから、今の上田城でないことは確かである。そこでこの上田旧城地というのは、今の上田城ができる前の真田氏の居館ということになる。



山家神社



山家神社の駒形稻荷社

ここで注目したいのは、真田町真田区にある山家神社である。この神社は延喜式に載っている1000年も前からの古い由緒ある名社であるが、これが実は六所社のあったところではないかと思われる。というのは、今の「大宮さん」の境内に

この六所社と並んで駒形社があり、大宮さんの由緒書には、この駒形社も上田旧城地にあったと記してある。そして、実は山家神社にも駒形社が祀ってあるのである。

そこで真田町の山家神社が六所明神であり、駒形社を祀っていて、上田築城のとき真田氏がこの大宮さんに移したものと考えられる。

山家神社や駒形社は、もともと真田氏の祀る神であって、何かの理由で戦国末期にここへ移した——とすれば、逆に真田氏はかつてはその六所明神や駒形社の祭主で、古来国府を守り、またそのための牧場を経営してきた氏族の末で、はじめから信濃国府と深い関係をもった有力な氏族であり、とくに国牧を経営する特別な任務を帯びていたことになるわけである。

こう考えてくると元來真田氏は信濃の「国牧」を支配し、監督する役職であり、それによって次第に大をなしてきた。中央政権の没落とともに、各地に共通している現象のように、そこを自分の私牧としてしまい、それを基盤として地方の有力な土豪に成長したものと考えられるのである。

以上が一志博士の真田氏発祥についての見解の概要である。それでは、この真田氏は一体どこを拠点として、この地方を支配していたものであろうか。以下真田氏城跡群の項において、同氏の見解および調査団の調査結果を記すこととする。

IV. 真田氏城跡群

(1) その概要と役割

一志博士の見解によれば——まず国代国牧の経営をしていたころの真田氏の本拠を想定すると、真田氏は国府の要人と考えられるから当時は国府におり、自分の配下を今の真田町地方に置いたと思われる。

まず1000年前創立の由緒ある実相院は、昔はるか北方の山腹堂平にあったといふし、この寺の本尊が馬頭観音であることから考えても、まず牧の経営者としての真田氏の祖先(実は大伴氏)は、あのあたりを本拠としていたと考えねばならない。あ



実相院

の辺に牧の平があったり、牧の内があつたりするからこの地域が問題である。傍陽小学校の近くに「堀の内」という地名があるし、学校の前の所を「表」といっている。あの辺が一番古いころの本拠地ではないかと推定される。

また曲尾に常光寺という寺の跡が残っている。これは真言宗であるから古い寺と思われ、また十王堂があったことから相当大きな寺であったと考えられる。この寺のある部落——すなわち曲尾に根小屋城という山城がある。小屋というのは城のことだがこの城も常光寺と関係させてみると相当古い時代からあって、洗馬地方を押える大切な役目を担っていたものと考えたい。



根小屋城跡



横尾城跡



市 神

次に横尾には、横尾城というりっぱな山城がほぼ完全に残っている。あの段郭のあり方をみると、特有な築き方をしていて、いかにも中世的な面影を残すが、これも曲尾の根小屋城と同

じく洗馬地方の重要な山城であったことは間違いない。横尾城の城下町として発達したのが横尾の部落で、市神が存在したり、付近に四日市という小字名が残っていたりする点貴重である。

この横尾部落の東方に内小屋^{うちこや}というところがある。これは内城という意味で容易ならざる地名である。この内小屋は信綱寺の前の平地へ続いている。信綱寺の前の

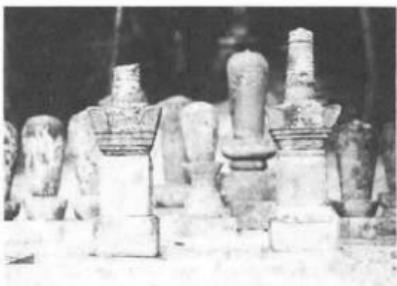


信綱寺内小屋付近



古 城

平地は大体4ha位の平地で二段になっている。この平地は、切図をみると楔形・黒門のあるところから全部同じ寺院境内となっている。これがむしろ古いころの内小屋屋の姿であろう。その南側の東西に古城とよぶ長い尾根がある。あの尾根のため、遙か南方からは信綱寺前の広場は見えない。古城の屋根の南方の急傾斜のところはいくつも段郭を設けて厳重に防備してある。これらの構えをみると、古城と呼ばれている尾根から信綱寺まで含めてが内小屋で、内小屋というより、むしろ中世ごろ



信綱の墓

の居館の跡と考えられる。真田信綱の靈を弔うために信綱寺を建てたというが、むしろ真田氏にとっては、古くから大変大切な場所であったのでわざわざその場所へ長篠で討死した御曹子の信綱の靈を葬ったのであると解釈した方が自然であろう。

そう考えてみると、あの横尾城というのは独立した城ではなく、内小屋に付属した城であろうと思われる。横尾城は非常に複雑なつくり方をしてあるが、あれは南方からくる敵に対して内小屋を守る性格をもっているが、曲尾の根小屋城もこの横尾城と同じ性格をもっていると考えられる。つまり横尾・曲尾の各城が連絡をとって、中世真田の本拠である内小屋を守ったものではなかろうか。その意味では大庭の八幡様の裏手にある城一洗馬城と称する一も地蔵峠方面から入ってくる敵を曲尾・横尾と連絡して防いだところと考えねばならない。

次に十林寺の城であるが—真田氏本城と称する—これはやはり古い構えで、あの築き方は戦国時代あたりのものではない。熊久保の方から上っていくと頂上まで、いくつもの郭があり、それから堀切があってその上が本城になっている。本城の南には大きな土塁があり、西北に向ってずいぶん広い面積の城館のあとがある。西側の急峻な斜面にも段郭がいくつもあって、厳重に防備している。なお熊久保部落の上方の山地から水を引いてきて本郭に入れている。中世このような築城技術を駆使しているところをみると、真田氏もなかなかの築城技術をもっていたことをうかが



真田氏本城跡



本城 壁 跡



本城南腹段郭



洗馬城跡

わせる。このようにみてくると、その規模の大きさ構えのあり方からして、これこそ真田氏の本城というべきものと考えられる。

よく、角間にある松尾古城(これについては後述する)がもとの真田氏のいたところで、だんだん下って来て今の十林寺の松尾城になったなどと説明されることがあるが、これは逆で、今まで十林寺の城が本城で、角間の城はその支城と考えた方がよい。

この十林寺の真田本城に対して、南方の尾根の上に天白城がある。ちょうど本城と天白城で熊久保のある谷間をだきかえたようなかっこうとなっている。鎌倉時



天白城跡



松尾城跡

松尾古城全圖

此圖は松代藩貞津正辰著「タルニ藤田周義落合保留
文庫」を参考。文政三年(1820)近藤孝矩縮写。



代の城の構え方によくこういうやり方があるが、その例の一つで、真田本城に対する副城という意味で天白城も重要な存在である。

角間と横沢の間にある城—松尾城と称する—これを松尾古城といわれてきたが、十林寺の城とは比べものにならない規模で、到底多勢の兵馬を収容することはできない。しかし場所は非常によく、ここで見渡せば大変眺望がきいて、洗馬の方を除くと小嶺の大体は見通すことができる。ことにあの場所から東の方には、山の尾根がずっと高くなり、「遠見番所跡」と称する所からさらにゴトミキ山というところへ出ると、そこに石積みがあり、そこならば上州側まで遠望できるという。おそらくこれは物見を兼ねたノロシ台であろう。この角間の城自身はそう大きはないが、非常な要所であるということになる。おそらく、菅平方面への道、鹿沢峠の方への道をあそこでおされたものであろう。

最後に一番問題なのが例の本原の「お屋敷」である。十林寺の城から「お屋敷」まで約800mある。ここは県の史跡指定地で真田信綱の屋敷ということになってい



真田氏館跡

るけれども、信綱は若くして(39才)長篠へ行って戦死している。その人のためにあれほどのものをつくったとはどうしても考えられない。構えをよくみていくと、あれはお屋敷というよりは城の構えである。屋敷だけというものは大体60間四方位であるのに、この構えは170間余の四方をもっている。信綱寺以前から何らかの中心であったと思われる。真田氏本城と結んで考えることが大切であろう。

そういうえば「お屋敷」の西側に本城から続いて立道という道が東西にはば直線に走り、両側が地割りをしてある。あの辺がはじめの真田氏本城の侍屋敷ではなかったか。立道が約700m近くあって、その先がいわゆる町となり、こんどは道が南北に走る。上町・北町・南町などという地名がある。そしてちょうど約90間位の町で堀が横切ってるので、あのあたりまでが町づくりをしたところであろう。町造りといつても「お屋敷」に対する侍町といってよい。いかにも真田氏の館にふさわしい壮大な侍町である。なおこの町の北はずれに地蔵堂があって、貞治2年(1363)という銘の入った宝篋印塔がある。南北朝の年号であるがこれは、町造りの時代を暗示するものとして貴重である。おそらく十林寺の城から、お屋敷へおりてきたころを示すものであろう。

十林寺の城の時代あの山の上に居館があるわけがない。その居館はどこにあったか、これはなかなかむずかしい問題であるが、真田区の中に甲子伝という小字があり、その外に本



宝霞印塔

町とかかまた(構え田のこと、何かの構えがあったことを示す)があるのでしかしたら初期真田の居館は、甲石あたりから山家神社・白山寺によったあたりにあったかもしれない。

なお戸石城と矢沢城は、真田氏本城やお屋敷の前面を固めるためには、なくてはならぬ重要な城であるが、これは上田市の区域となっているので、ここでは説明を割愛したい。

また、真田氏本城の背後には、角間の谷に鬼ヶ城があり、傍陽の谷に猿ヶ城がある。これは非常の場合、妻子などをかくすための詰めの城として重要である。また菅平にある三日城や大日向にある城ヶ平なども同じように詰めの城の意味をもつ存在であったと考えられる。

こう見てくると、真田町に現在する以上の城砦は何れも真田地方を守るために、相互に強い連絡をもって築かれており、東西南北、十重二十重に本城を固めている状況にある。実地踏査をすればするほどその感が深くなるのであって、真田氏という一土豪が全国的な大名に成長した基盤がよくわかる。

ここでもう一度これらの城郭と真田氏の生長のあとをふりかえってみると、古代国牧の経営者としての立場にあった真田氏は、まず今の傍陽の実相院から小学校あたりにかけて(あるいは堀の内辺に)本拠をもっていた。そして国牧の経営をやり、國府でも有力者として目されていたが、中央の政権が衰えてくると、國牧は私牧と



となり、それを基礎として土豪として成長していく。それは鎌倉時代に入る以前かと思われる。

それから真田氏は今の真田地方全部を支配するため、今の信濃守前の平地——すなわち内小屋(内城のこと)に本拠を移した。そして横尾城を山城とし城下町を内小屋の前面に開いた。それが横尾集落で中世のものだということは、四日市という三斎市の名があることによって明らかである。

その後真田地方の防備を本格的なものにするためには、ぜひその中心に大規模な山城をつくる必要があった。そのために出来たのが十林寺のいわゆる本城であってこれを中心として前述の通り十重二十重といってよい程の多くの衛星的な城を築くことによって、真田氏の位置はますます強固となった。その十林寺の本城に対する居館址は、はじめ城の北側の真田区にあったが、後に南面に移し堂々たる居館を構築した。今にいう「お屋敷」がこれである。このお屋敷や十林寺の本城が、天正13年まで統いて上田築城の際、原にあった城下町までの一切が上田城下に移った。上田城下町の基幹となった原町の名は、この原から移転したためつけられた名であることはいうまでもない。(だから移転後の原は元原——本原とも書く——というのである。)

この真田氏は上田築城後、元和8年(1622)まで上田に在城したが、後松代へ転封させられた。それから250年間松代藩主として続き幕末に至った。信州に生まれ他国に転封することは一度もなく、信州で終焉を迎えた信濃国唯一の大名であった。そして名将真田幸村を生み、全国にその名を知られる家系となったことはあまりに有名である。



真田氏城跡群はこのような真田氏の発祥からの歴史を、如実に物語る存在として極めて貴重なものといわねばならない。

一志茂樹氏(前長野県文化財保護審議会長)が、信州に残る城跡群としては、もっとも典型的なものとして、4か年にわたって調査に来町し、その間、上田・小県誌をはじめとする地方史研究者が、これを助けて、全町徹底的な踏査を実施した。さらに町の理事者は教育委員会を中心として総力をあげて、これを支援し、この事業に投入した予算をみても熱意のはどがうかがえる。しかも地上踏査のみでなく、航空測量も実

施するなどして、厳密な地形図をつくり、さらに精細な小字名図をつくる等、目下許される範囲の科学的資料を備えて調査者の便宜をはかったことも稀な例といってよい。

この調査報告書は、その成果としてまとまったもので、もちろん後日の補訂にまたねばならぬ点も多くあろうが、文献のないところにおいても、総合的な調査によってこれだけの成果をあげ得るという事例を示した点でも、その意義は大きかったといえよう。

調査の全貌を詳細に記すことは、他日にゆずり紙数の許される範囲において、本城跡群中特に重要と思われるもの7か所に絞り、その概要を記した。これら貴重な城跡群が将来にわたって保護され、いわゆる「乱開発」から免れ、永く活用がはかられるこことをねがって、関係各位の慎重にして迅速なる対処を要望する次第である。

あとがき

真田氏の発祥にかかる城跡群は、積極的な保護施策もないまま、永い年月の経過がありました。幸い周辺での諸開発事業にもかかわらず関係者の理解と努力により、城跡の景観、遺構はよく保存され続けてきました。

城跡と名づけられた所は県内方々にありますが、本城跡群は7か所もの城郭が一大城跡群という構造において、その典型的要素を多く包含しており、刮目にあたるべき貴重な存在であることが、数次にわたる前述の調査によって判明してまいりました。

真田町のシンボルであるこれら城跡群を、保護保存する気運が地元でも急速に高まっている機会に、多くの地権者の賛同を得て、一日も早い県史跡指定への願望を達成したいと考えて、事務を進めているところですが、そのためにも本調査報告書が大きく役立つことを期待しております。

なお、報告書中の「真田地区牧関係地名分布図」は上田小県誌歴史篇上所載のものを、また遺構図中の「実測図」は山岸忠氏の提供によるものです。ここにお断りして感謝申しあげます。

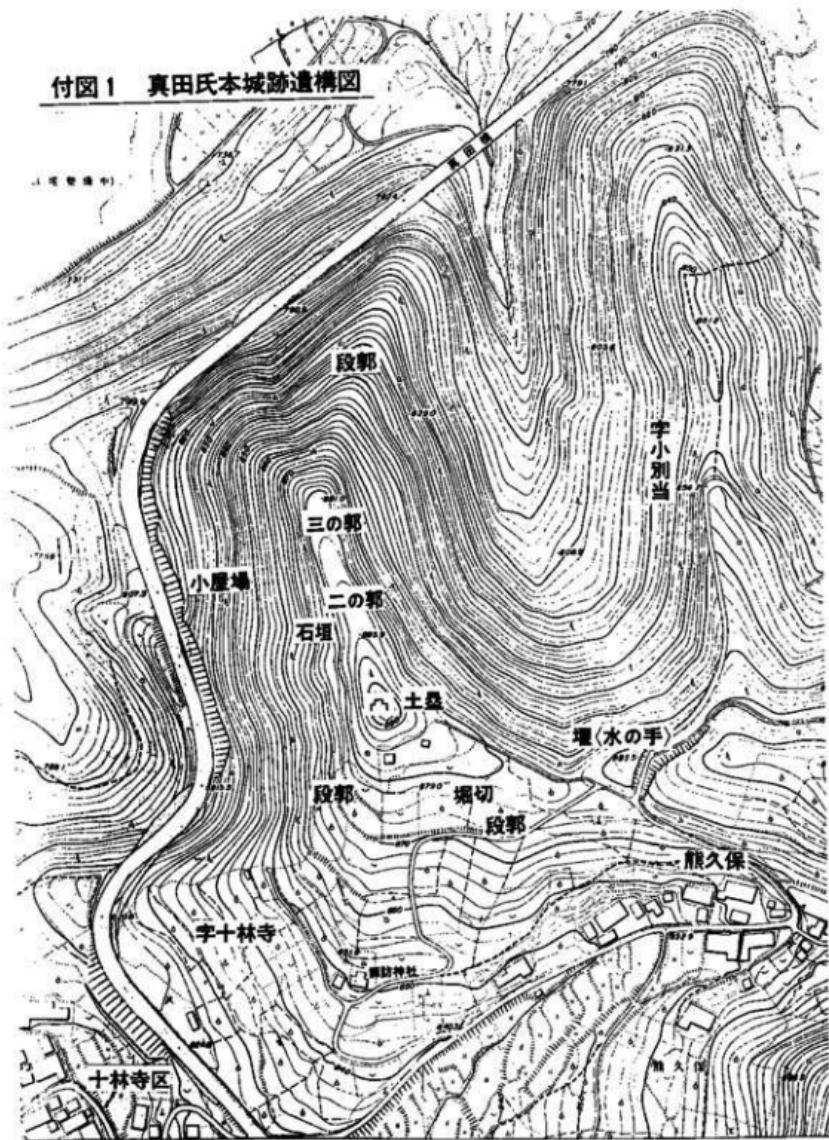
(久保浩美)

真田氏城跡群

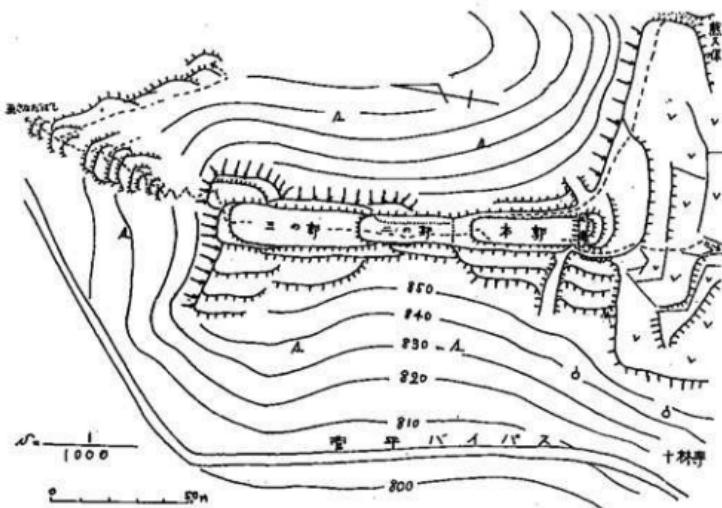
1
25,000

1	真田氏本城跡
2	天白城跡
3	松原城跡
4	横尾城跡
5	内小屋城跡
6	横小屋城跡
7	洗馬城跡

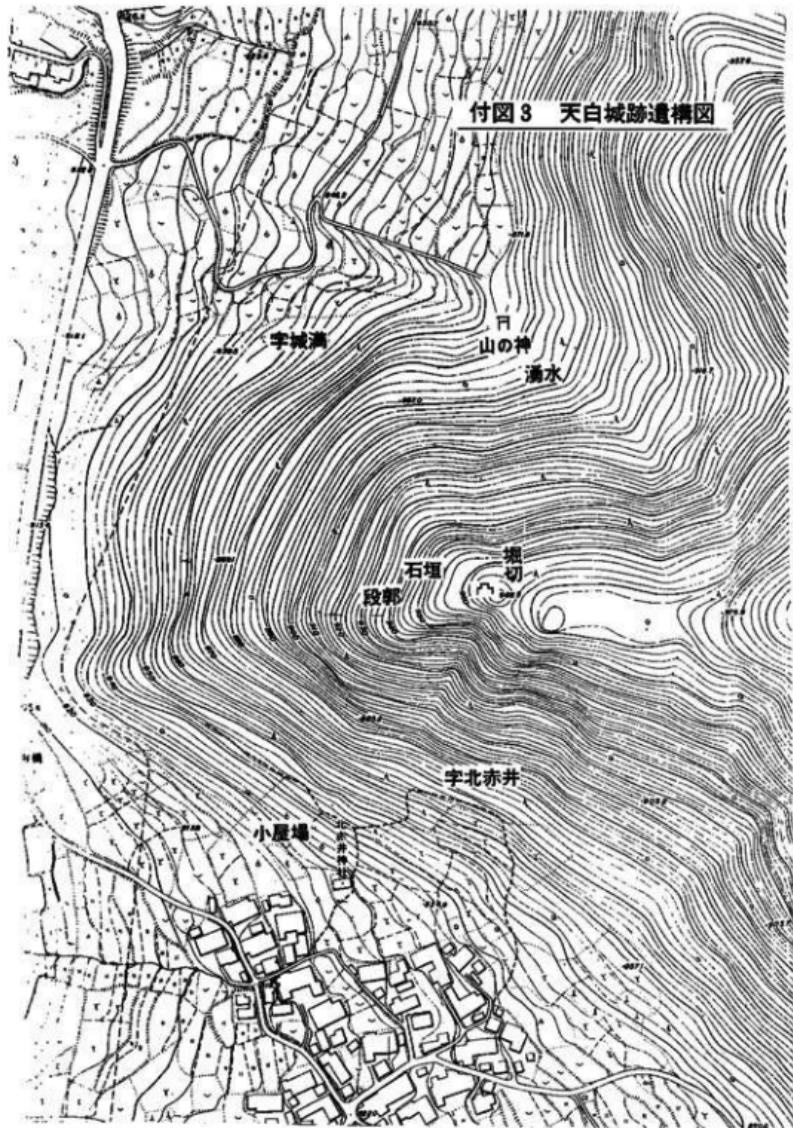
付図1 真田氏本城跡遺構図



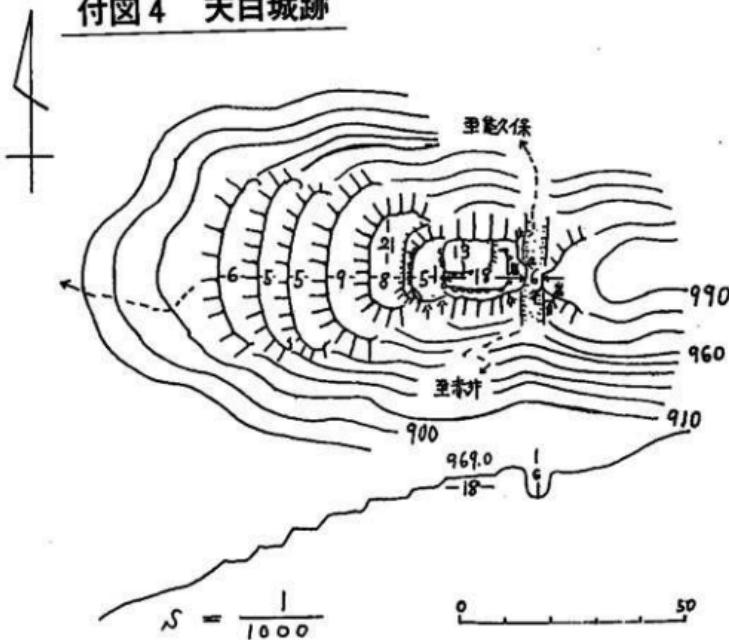
付図2 真田氏本城跡



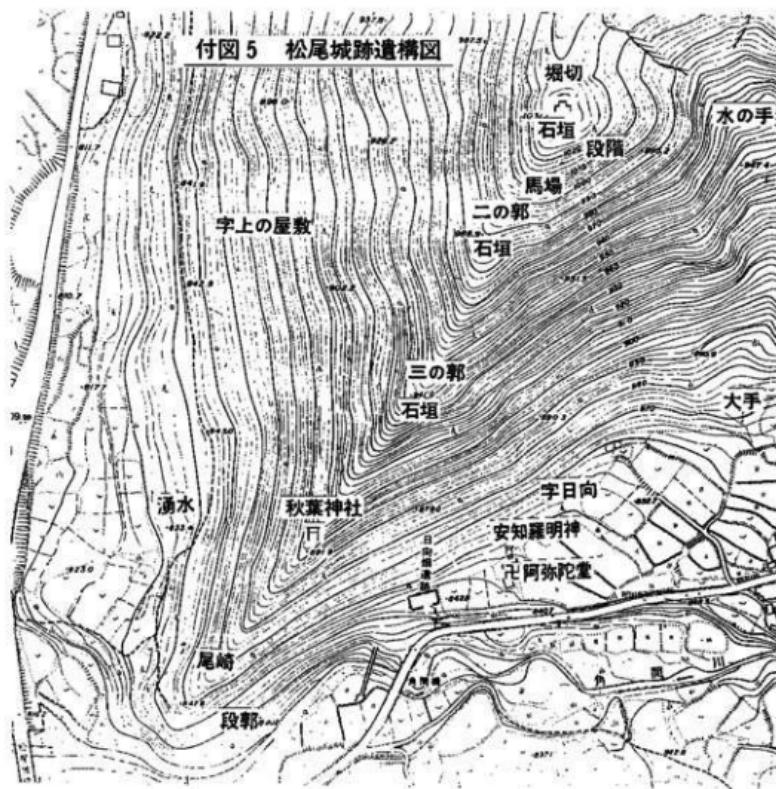
付図3 天白城跡遺構図



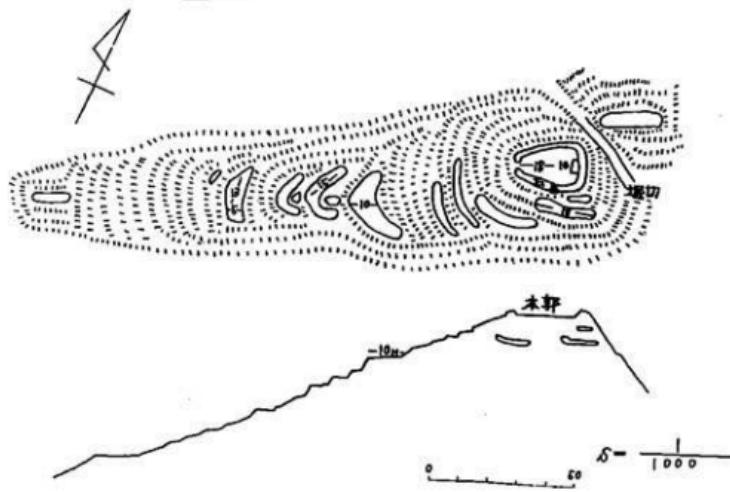
付図4 天白城跡



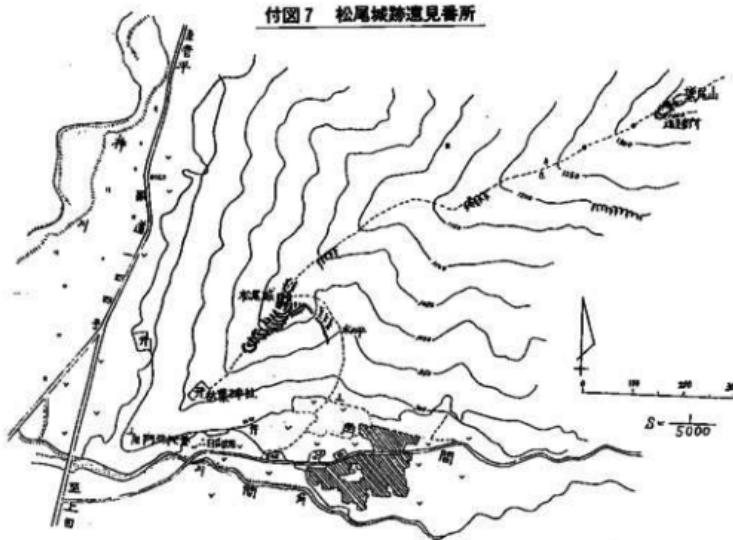
付図5 松尾城跡遺構図



付図6 松尾城跡



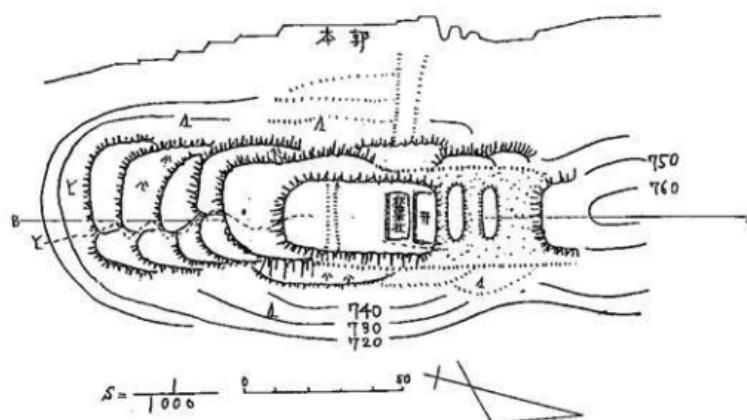
付図7 松尾城跡遺見番所



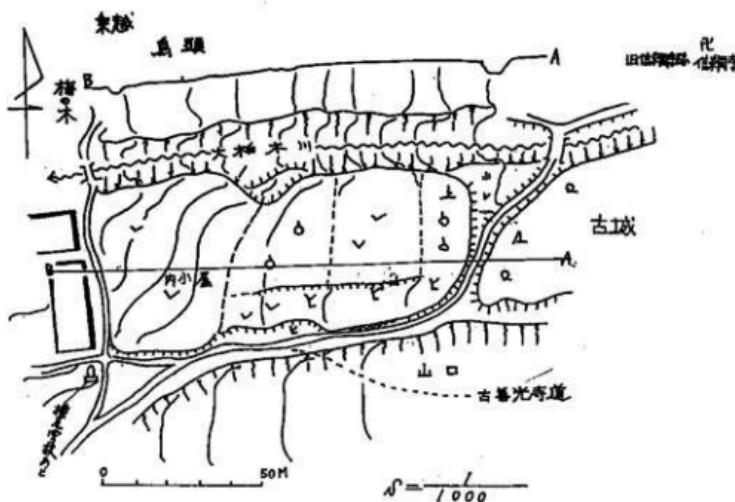
付図8 横尾城跡・内小屋城跡遺構



付図9 横尾城跡



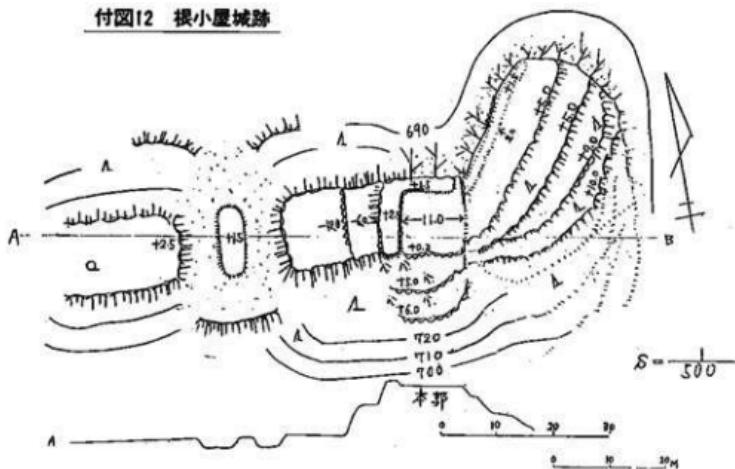
付図10 内小屋城跡



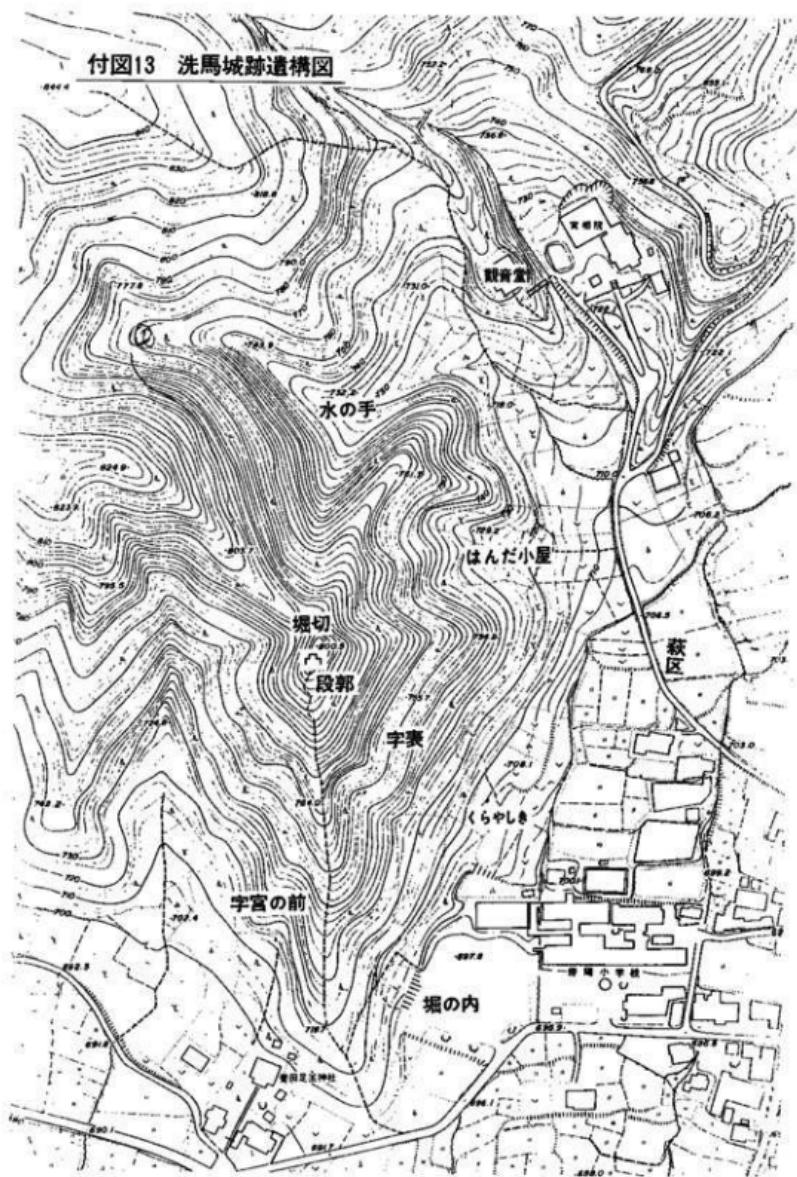
付図11 根小屋城跡遺構図



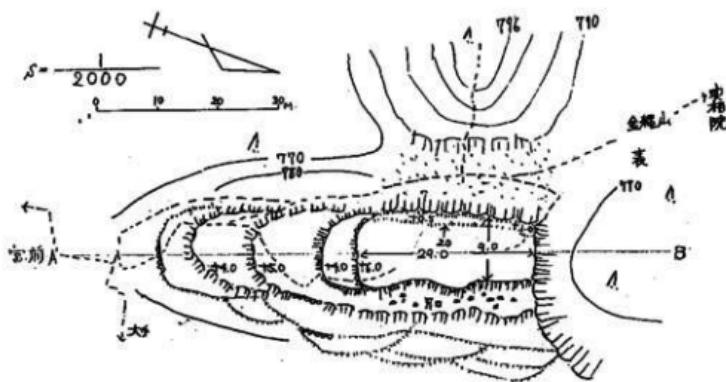
付図12 梶小屋城跡



付図13 洗馬城跡遺構図



付図14 洗馬城跡



真田町文化財調査報告書

真田氏城跡群

昭和 57 年 8 月 30 日印刷発行

発行者 長野県小県郡真田町教育委員会

印刷所 南中沢活版所



